

Title	次号目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.11 (1961. 11) ,p.1031(99)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19611101-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

生産の定礎期に生きたウァイトリングの時代的限界ともいえる。著者はさらに、ウァイトリングの社会主義思想を通じて、婦人への同情 (S. 128)、宗教の階級的性 (S. 135) などについて評価しながら、第三章階級闘争および革命においては、階級闘争の認識の不足、階級分析の欠如などについて鋭い批判を展開している (S. 136)。

最後の第三部ウィルヘルム・ウァイトリングの歴史的意義においては、科学的社会主義の出現を準備したその革命的な役割を指摘しながら、同時に、彼自身、近代的なプロレタリアートに移行しつつあった社会層の代弁者であり、その子供であったために、歴史的法則性、階級闘争の物質的基礎あるいはプロレタリアートの世界的な使命などについて、充分な認識に到達することができなかった点を指摘している。

本書は、わずかに二〇〇頁の本であるにもかかわらず、ウァイトリングおよびその当時のドイツ社会主義を識るための忠実な案内書ともいえる。筆者自身ドイツ社会主義運動に手をそめたばかりであり、本書を批判する資格はないが、ただつぎの三つの点を読後感としてのべておこう。(一)本書はすぐれた分析であり、克明な研究であって、とくに、ウァイトリングの思想をフランス啓蒙思想とフリーエ主義およびバブーフの共産主義思想との関連において把握したことは興味深い、ドイツ社会主義者との関係、例えばユング・ヘ

の需要と社会の能力との弁証法的な関係についての認識、自然条件の重視、これらは啓蒙主義とフリーエ主義からくるものであるというのである。とりわけ啓蒙主義の決定的な影響とみられるものは、人間社会の発展を、(一)原始状態の時期、(二)不平等と奴隷制の時期および(三)財産共有の時期という時期区分である。しかし著者が、ウァイトリングの思想においてもっとも深い関心を示したものは、社会批判であり、本書のなかでもっとも重要な部分をなしていると思う。

著者によれば、「ウァイトリングの批判は、本質的にユートピア主義者の道徳的立場に立って動く」のであって、その限りにおいて、フランス啓蒙思想のフリーエ主義と同じ程度における影響にもかかわらず、体制としての資本主義の認識と批判において欠けるところがあった。たとえば、私有財産をもって、労働と享樂品との不平等な分配の結果であり、人間による人間の搾取の象徴と考えるばかりでなく、戦争を導きいれる元凶であるとし、しかもそれが永遠不変の制度ではないとしているのは、正しいが、著者によれば、財産の蓄積と社会的生産の発展との歴史的関連、すなわち労働生産性の上昇のひとつの槓桿としての私有財産の役割をしていなかったという事実、不平等の歴史的根源を、生産の法則に求めずに交換の形態に求めたということ、従って高利貸資本および商業資本の役割を重視し、そのために、剰余価値法則を認識することができなかったことを著者が指摘しているのは面白い。これはウァイトリングの職人的・手工業的生産(＝問屋制家内工業)から精々マニファクチュア

ーゲリアンとの比較などがなされないのは、一寸手落ちのような気がするであろうか。(二)それはまたドイツ労働運動にあたえた影響、その役割(もちろん断片的には教養団体＝Bildungsvereinにたいする影響についてふれられてはいるが)にたいして、あまり関心がむけられていない点とも関係がある。(三)つまりウァイトリングの共産主義は、労働者階級との接触の上に樹立されたのであって、その意味ではマルクスやエンゲルス以外の他のドイツ社会主義者の誰よりも先んじていた。とすれば、ウァイトリングのドイツ社会主義運動史上における意義を正しく評価するためには、以上のような視角が必要ではなからうか。

- (一) Marx und Engels, Gesammelte Werke, Bd. 4, SS. 147—148.
- (二) E. Kaler; Wilhelm Weitling, Seine Agitation und Lehre im geschichtlichen Zusammenhang dargestellt, 1887.
- (三) Mehring; Die Geschichte der deutschen Demokratie, 2 Bde. 1961. H. Schlüter; Die Anfänge der deutschen Arbeiterbewegung.
- (四) エンゲルス著、大内兵衛訳「空想から科学への社会主義の発展」(岩波文庫)二二頁。

書 評

——一九六一・九・一三・深更——

次号目次

論 説

豊かな社会に於ける経済問題……………千種義人
経済成長と設備投資……………大熊一郎

資 料

十九世紀末における
ドイツ独占資本と保護関税政策……………飯田鼎
江戸近郊農村の農民負担に関する一考察……………佐々木陽一郎

学 界 展 望

インフレーション理論の展望……………福岡正夫

書 評

エリー・ブレイウィ著
『トーマス・ホジスキ』……………飯田鼎
ミシェル・フオントネ著
『ペイザンと農村のマルシャン』……………渡辺國廣
川元英二著
『アメリカ退職年金制度』……………庭田範秋

新刊紹介